

# 燕尾服着初の記

徳富盧花

青空文庫



## (一)

此れは逗子の浦曲に住む漁師にて候、吾れいまだ天長節外務大臣の夜会てふものを見ず候ほどに、——と能がりの足どり怪しく明治卅二年十一月三日の夕方のそりく新橋停車場の改札口を出で来れるは、斯く申す小生なり。

懐中には外務大臣子爵青木周蔵、子爵夫人エリサベツトの名を署したる一葉の夜会招待券を後生大事と風呂敷に包みて入れたり。そも此の招待券につきては、待つ間の焦心、得ての歡喜、紛失の恐れ、掏摸の心配は、果たして如何なりけん。貧乏人が一万円の札を手に入れたる時の心地ぞ斯くある可しと思ひぬ。偕招待券は首尾よく手に入りぬ。一難纒に去りて一難また到る、招待券には明記して曰く、燕尾服着用と。燕尾服、燕尾服、あゝ燕尾服、爾を如何。小生の古つづらに貯ふる処は僅にスコツチの背広が一領、其れも九年前に拵へたれば窮屈なること夥しく、居敷のあたり雑巾の如くにさゝれて、白昼には市中にあるけぬ代物。あゝ困つたな、如何したものであらう、損料出して古着屋から借りるかな、など思うて居る内、燕尾服が無くて困るだらう、少し古いが余計なのが一領あ

る、貸してあげよう、ついでに着せもしてやらうと青山の兄から牡丹餅の様に甘い文言、儲こそ胸撫で下し、招待券の御伴して、逗子より新橋へは来りしなりけり。

燕尾服の手前もあれば、停車場前の理髪店に飛び込み、早く早くとせき立てながら、髪刈り、髭剃り、此れならば大丈夫と鏡を見れば、南無三、頭は仏蘭西流とやら額のあたりだけ長く、後短につまれて、まんまと都風になりすましたれど、潮風に染めし顔の何処までも田舎らしきが笑止なる。よし、本来の田舎漢、何ぞ其様な事を気に介せむや。吾此の大的眼を睜りて帝国ホテルに寄り集ふ限りの淑女紳士を睨み殺し呉れむず。昔木曾殿と云ふ武士もありしを。

## (二)

車を飛ばして兄の家に着けば、日暮れたり。其れ夕飯よ、其れ顔洗ふ湯をとれ、と台所を犇めかして、夜会の時間は午後八時、まだ時もあれど用意は早きが宜しと、早速更衣にかゝりぬ。

兄、嫂、阿甥、阿姪、書生など三階総出の舞台の中央にすつくと突立つ木強漢（むくつ

けをとこ)。其れ鞢（くつした）をお穿きなさい。鞢は穿きぬ。今度は糊のごわくしたる白胸（しろむね）シャツを頭からすつぽりかぶされて、ぐわさぐわさと袖を通せば是はしたり袖（そで）、拳（こぶし）を没すること三四寸。

「まあ、如何しませう」

「縫（ぬい）あげするさ」

「一寸と糸を持つて御出」

腕（うで）をつて毒箭（どくや）の毒をぬかせた関羽（くわんう）もどきに、小生はぼかんと立つてぬつと両手を出して居れば、阿姪（あてつ）が笑ひく縫い上げをなし終りぬ。シャツの肩上げは済みたり。いでカラアの鈕（ボタン）をはめむとするに、手の短いかはりに、頸（くび）は大きく、容易（はま）に簞（はま）らず。幸なるかな、書生君は柔術の達人なれば、片手に咽（のど）をしめ、片手にカラアをひいて、頸（くび）はやうくカラアに入りぬ。此間小生は唯運を天に任し、観念（まなこ）の眼を瞑（ねむ）つて、屠（ほぶ）られむとする羊の如く（たす）みたり。

あとはネクタイ、ズボン、胸衣（チヨツキ）、上衣（コート）、と苦もなく着せられ、白の手套（てぶくろ）は胸のポツケツトに半分出して入れて置くものと教へられて、此れで装束は一先づ成りぬ。

「立派々々、其れ鏡」と見せらるゝ鏡の中を覗けば、顛（あらは）れたり一個の紳士、真黒羅紗（まつくろらしや）の

間より雪とかゞやき出でたる白シャツに赤黒の顔のうつりも怪しく、満面に汗ばみて、咽のあたり赤き擦傷すりきず（蓋しカラアと咽の合戦の結果）一きは目だち、咽をカラアにしめられてしきりに堅睡かたづをのむ猪首みくびのすわり可笑しく、胸をシャツ胸衣チヨツキに窄められてコルセツトを着けたるやうに呼吸苦しく、全体宛ら糊されし様に鯁張しやちばりかへつて、唯真すぐに向を見るのみ、起居振舞たちぬふるまひ自由ならざる、如何どうしても明治の木曾殿と云ふ容子ありさま。あゝ如何しても「かりぎ」はまづい、窮屈な燕尾服でつまらぬ夜会とかを覗のぞかうより、木綿縞もめんじまに兵児帯へこおび、犬殺いぬころしのステツキをもつて逗子の浜でも散歩した方が似合つて居た、と思つて最早斯うなつてはあとの祭、阿姪阿甥書生等あてつあせいとうの眼を避けて、鏡に背そむいて澄すまし居たり。

暫くすると、最早時刻だ、出かけようとシルクハットを持つて、兄が出て来たので、吾も煙突を筒切りつぎしたやうにごわくしたるシルクハットをのせて、ズボンのちぎれを気にしてやうく靴をはき終わり、二輦の車はからくと玄関さきを出でたり。

## (三)

二輦の車は勢いきほひよく走せて、やがて当夜の会場帝国ホテルにつき、電灯花はながす瓦唇あざむを欺あざむき、

紅こうとうくう灯笼とう空くうにかゝり、晴がましきこと云ふばかりもなき表門をばぐるりと廻りて、脇門わきもんより入りぬ。去年の混雑に懲りて、今年馬車と人車の入口を分わかちしなりとぞ。

クローケルム  
外套室くわんに外套と帽シルクハット子を預けて番号札を受取り、右折すれば電灯の光眩まばゆき大玄おほげん

関くわんなり。柱をば杉檜の葉もて包み、大なる紅葉の枝を添へ、壁際かべぎは廊下には菊花壇を作

りて紙灯しちやうをともしたるなど、何となく鬼き一の菊畑でも見物する心地あり。借主人の鬼一

殿は何処おほに在おほすぞと見てあれば、大玄関の真中に、大礼服の装美よそほひ々しく、左手ゆんでに劍けんぱを握

り、右に胡麻塩ごましほの長ちようせん髯ひげを撫ふし、厳いかめしき顔して、眼鏡を光らしつゝ佇たうずみたまふが、当夜

の御亭主青木外務大臣の君なり。相並んで一きは大きく二十四五貫目たしかにかゝりたま

ふべく思はれて、のさばりかへりて居たまふは、子爵夫人エリサベツトの君。其の側に夫

人の小くしたる様なるが、青木令嬢なるべし。吾が近眼にはよくも見えねど、何やらん白し

繻子ろじゆすに軟やはらかき白毛ふちの縁ふちとりたる服装して、牙柄がへいの扇あふぎを持ち、頭うづこの揺うごく毎ごとにきら／＼光るは

白光はくわくの飾櫛しゆちんにや。此の三人を正面にして、少しさがりて左手ゆんでには一様に薄うすいろ色すそもよう裾すそ模様

の三枚がさね、繻珍しゆちんの丸帯、髪はお揃そろひの丸まるまげ鬚ひげ、絹足袋あさうらに麻裏あさうらと云ふいでたちの淑女

四五人ずらりと立ち列ぶは外交官の夫人達。此方こなたに紅くれなゐ菊あざきくの徽章きしやうつけし愛嬌あいけう沢山の

紳士達の忙しげなるは接待係の外交官なるべし。

斯く眺め候ふほどに、先入の客は何れも亭主の大臣夫婦に会釈してゝのきたれば、今は小生の順番となりぬ。先氣を丹田に落つけ、震ふ足を踏しめ、づか／＼と青木子の前にすゝみ出で、怪しき目礼すれば、大臣は眼鏡の上よりぢろりと一瞥、むつとしたる顔付にて答礼したまふ。次に夫人令嬢を一括して目礼すれば、夫人は怪訝の眼を睜りて、ぢろりと睨みまふ。肝を冷やしてそこに片寄り、群衆の中に立まじりて、玄關に入り来る人々を眺むるに、何れも／＼先づ子爵夫人に会釈して然る後主人に会釈す。しくじつたり、吾は何気なく主人を先にしたるが、此処は夜会の場、例の男尊女卑は大禁物、殊に青木子は濟まなかつた、と思つても下司の智慧はあとで、後悔はさきに立たず。今宵の失策のし初めと、独頭かく／＼猶も入り来る人々を眺め居たり。

流れ入る客はしばらくも止まらず。夫妻連れの洋人、赤套の英国士官、丸鬚束髮御同伴の燕尾服、勳章眩ゆき陸海軍武官、商人顔あり、議員面あり。都貌あり、田舎相あり、髯あり、無髯あり、場馴れしあり、まごつくあり、親しきは亭主夫婦と握手して、微笑してかはす両三言、さもなきは小生と同様澄しかへつた一点頭、内閣大臣、外国公使等身分高きは右なる特別室に、余は左なる喫煙室婦人室にそれ／＼入り行く。

忽ち青木外相夫婦及び令嬢が、ずうと玄關の入口まで出で行くを何事と眺むれば、閑



院のみや 宮 同妃殿下の来りたまへるなり。群衆はさつと道を開きぬ。外相は 桃とうこうしよく 紅色の洋服を召したまへる妃殿下を扶たすけて、先に立ち、宮殿下はエリサベツト夫人と相あひたつぎ 携へて、特別休憩室に入りたまひぬ。やがて有ありすがわのみや 栖川宮同妃殿下、山階宮やましなのみや 同妃殿下も来たまひぬ。新に入り来る客は漸く稀まれになりて、集つどへる客は彼処に一団、此処に一塊くわい、寄りて話し離れて歩む。彼処に大きな坊ちやまの如くにこく笑ひながら話すは、大山参謀総長なり。此処に眉まゆを顰ひそめて語るは児島惟謙氏こじまみけんなり。顔も太く、腹も太く、肝きも太く、のそりくと眼をあげて見廻すは大倉喜八郎氏なり。黄海の勇将は西さい比い利り亜あの横断者と話し、議員の勇士は学界の俊秀と語る、何処を見ても名士の顔かほ揃そろひ、日本の機関を動かす脳髓は大抵此処に集まつて居ると思へば、彼処の話も聞いて見たく、此処の顔も覗のぞきたく、身は一つ心は千々に走せまはつて、匆そう々く忙ぼう々くと茫然自失する折から人を躍をどり立たす様な奏樂そうがくの音起つて、舞踏室の戸は左右に開かれぬ。

## (四)

洋々たる奏樂の音起ると共に、外相は有栖川宮妃殿下を扶け、有栖川宮殿下はエリサベ

ツト夫人と相<sup>あひたづさ</sup>撃<sup>う</sup>へ、其の他やんごとなき方々香水のかをりを四方に薫<sup>くん</sup>じつゝ、舞踏室に入りたまひぬ。其のあとより舞踏手と見物と吾れさきに進み入る。余は素<sup>もと</sup>より舞踏なんど洒落<sup>しやれ</sup>た事には縁遠き男なれど、せめて所<sup>いはゆる</sup>謂<sup>い</sup>ウオールフラワアの一人ともなりて花舞ひ蝶躍る珍しきさまを見て未代までの語り草にせばやと、人の背後よりのそく舞踏室に入りたり。

此処は帝国ホテル随一の大<sup>ホ</sup>広間。正面には緑<sup>りよくえぶ</sup>葉<sup>ぢ</sup>の地に「聖<sup>せいじゆばんざい</sup>壽<sup>じゆ</sup>萬<sup>ばん</sup>歳<sup>ざい</sup>」と白く菊花にてぬきたる大額をかゝげ、天井には隙間<sup>すきま</sup>もなく列国旗を掛けて、五色のアーケ灯の光もあやに、床は鏡の如く磨きたればきらしく照り渡りて、燕尾服、桃<sup>ときいろふく</sup>紅色服、水色服、扇影<sup>せんえい</sup>、簪<sup>さんくわうしんし</sup>光<sup>くわう</sup>参<sup>さん</sup>差<sup>さ</sup>として床の上に落ち散りたり。氷よりも滑かなる床のすべり易きに、吾は小心翼々としてぬき足さし足一<sup>あ</sup>刻みに歩みつゝ、壁際に置かれたるソファの辺<sup>あたり</sup>に立ちて見る。はや「カドリル」ははじまりて、聞くだにも吾足のひよこく浮き立つ陽氣の調<sup>しらべ</sup>につれて、幾組の和洋男女は規則正しく一歩々々歩み出では、また一歩々々歩み帰る。やがては入れ乱れ、入れちがへ、手をとり、くゞり、寄り、離れ、コムビネーションの妙を極む。「ワルス」はあまり気にくはねど、「ポルカ」「ガロツプ」「ランセース」いづれもさら々と元氣よく、躍<sup>をどり</sup>にしても体操にしても極めて面白く思はれたり。数番の舞踏

済みて、額ひたひに加ふる白手巾ハンケチ、胸のあたりに閃ひらめく扇、出で、ラムネを飲むあれば、彼方此方と巡廻へめぐりて、次の番組の相手を求むあり。きちようめんなる山やまがた県首相は閑院宮殿下、有栖川宮殿下と立ちながら何か話せば「聖壽萬歳」の額の下なるソファには各妃殿下の花の如くに坐して外国使臣の夫人などの挨拶に答へたまふ。時計の鏈くさりを繻珍しゆちんの帯の上に閃かしたるちぐれ毛の束髪ひくの顔は醜ひくくたけ矮ひくき夫人の六尺近き燕尾服の良人の面仰あたまをのぞぎつゝ、何やらん甘へたる調子にて物尋ねらるゝ、曙あけぼのそめ染ふりそでの振袖たけながに丈長しほろのいと白りよくびんう緑りよくびん鬢もいにうつりたる二八ばかりの令嬢の姉なる人の袖に隠れて物馴れたる男の言ふに言葉はなくて辞儀ばかりせられたる、蓄音機はやどりと速はやどり撮写真ほと欲ほしき事のみ多し。斯る間を主人の外相の足にまつはる剣をうるさげに左手ゆんでに握りて、眼鏡の顔を少し仰むけ、あちこち行きかへりして心つけらるゝ御苦勞千万——思へば外務大臣にも減多になれぬものなり。

室内うんきの温気うんきの耐へ難きに、吾はそつと此処を滑り出で、喫煙室の方に行きぬ。婦人室の前を過ぐる時、不図ふと室内を見入れたれば、寂々せきくたる室の一隅の暖炉ようを擁ようし首あつを鳩あつめて物語る二人の美人。よくよく見れば、伊東巳代治みよぢの君と岡崎邦輔の君となり。何れ劣らぬ梅桜、世にもしほらしき人達にて在おはせば、婦人室は尤も似つかはしく、何事をか語らひて居たまひけん。其は知らねど、政治小説でも書く人ならば、見のがすまじき場シーンなるべしと思ひ

たりき。

喫煙室には煙草の煙の間に、談話湧き、人顔おぼろに見え、テーブルの上には錦手の皿にまき羊羹の様なるものを積みたり。先刻より空腹に、好物のまき羊羹を見て咽は頻りに鳴る。一つつまんで見て呀と心に叫びぬ。南無三、此は葉巻だ、喫煙室に葉巻の接待はさうあるべき筈。君子は義を喻り下戸は甘きに喻る、儲こそ御里があらはれたれ、眼が近いに気が遠いと来て居るので、すんでの事に葉巻を一口に頬張つて、まんまと耻を帝國ホテルに曝す所だつた。誰か気づきはしなかつたかと恐々ながら見廻せば、そんな様子もなし、あゝ危いかな、君子危きに近寄らず、こんな所は早く出るに若かずとそこく喫煙室を廊下に出る時、はたと行き逢ひたる二人の一人は目から鼻へぬける様な通人の林田翰長、半面の識もあればと一礼するに、何しに來たと云ふ様な冷瞥を頭から浴せられ、そこく退陣しつ。今一人の薄汚なき小男を後にて聞けば、失敬な世に安伴と呼ばれて中々甘くない精悍機敏の局長なりけり。

左る程に舞踏の五番済みて、立食の堂開かれたれば、衆寶吾もくと急ぎ行く。吾もつゞいて入るに、こゝは此度新に建てし長方形の飯屋にて二列にテーブルを据ゑ、菓子塔柿林檎の山、小豚の丸煮、魚、鳥の丸煮など、かずくの珍味を並べ、テーブルの向

ふには給仕ありて、客の為に皿を渡し、物を盛る。吾は皿とナイフ、フォクを受取りてお  
 づく、小豚を襲ひたれども、皮硬うして素人の手に刻まれねば、給仕を頼みて切りて貰  
 ひ、片隅に割扱し、食ひつゝ四方を見るに、丸鬚の夫人大口開いて焼鳥を召し、金  
 縁眼鏡の紳士林檜柿など山の如く盛りたる皿を小脇にかゝへて「分捕々々」と駆けて来  
 たまふなど、ポンチの材料も少からず。中にも面白きは清国人の何れの身分ある人物に  
 や、緞子の服の美々しきが、一大皿を片手に、片手はナイフ、フォクを握りて、魚と云  
 はず、鳥と云はず片端より截りては載せ、截りては載せ、こゝを先途とまづ貯へたまひけ  
 るが、何れの武官にやそゝくさ此方へ来らるゝ拍子に清人の手にせし皿を斜めにし、鳥  
 飛んで空にあり、魚床に躍り、折角の赤筋入りたるズボンをあたらだいなしにして呆然  
 としたまひし此方には、件の清人惜しき事しつと云ひ顔に遽て、床の上なるものを匙も  
 てすくひて皿に復されたるなど、其の国の気風性癖も見えて面白かりき。

食堂を出で、再び舞踏室に入る。夜は漸く深くて興いよく、深し。ワルスの調面白く、  
 吾も内々靴のかゝとを上げ下げして、今にも踊り出さうになりぬ。忽ち場内のわあつと  
 騒ぎ立ちて、撞と音するを見れば、斯は如何に紅色の洋装婦人と踊り狂へる六尺ゆたか  
 の洋人の其の鼻尤も鳶に似たるが、床の滑かなるに足踏みまらして、大山の顔るゝ如く倒

れしなりけり。洋装婦人の顔は着たる衣の其れよりも紅くれなゐになりぬ。倒れし男はそこゝに舞踏室を逃げ出したり。

成程花は半開、興は八分、あまりに狂へば過あやまちに終る、最早夜も一時を過ぎて、宮家の方々も帰りたまひぬ。さき程よりストオヴの暖気、ヴァイオレットの香かほり、嬌紅けうこう艶紫えんしの衣の色、指環ゆびわう腕環うでわの金玉の光、美人（と云はむは偽いつはりなるべし、余は不幸にして唯一人も美人をば夜会の席に見る能はざりければ）の微笑、勲章大礼服の閃き、などに射られて少々逆上のぼせ気味の、長座せばいよゝのぼせて、木曾殿も都みやこ化くわして布衣ほいを誇る身の万人じんしやく一ひと爵しやく崇拜しゆうがいと宗旨しゆうし変かへでもしては大変、最早こゝらが切り上げ時と、先刻よりはなればなれになりし兄を尋ぬるに、これはずるい、いつかさつさとお帰りになつて居る。

後おくれたり、と玄関に走せ出で、やつと車を見出して、急げゝと車夫を急がし、卅分後に兄に窮屈千万なる「余が最初の燕尾服」を脱ぎぬ。

# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻75 紳士」作品社

1997（平成9）年5月25日第1刷発行

底本の親本：「蘆花全集 第三巻」蘆花全集刊行会

1929（昭和4）年2月

入力：浦山 敦子

校正：noriko saito

2009年6月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 燕尾服着初の記

徳富盧花

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>